

# 幼稚園教員の子どもへの関わりかたについての一考察

飛 田 隆

## 1. はじめに

幼稚園教員の子どもへの関わり方が大切なことは幼稚園教育において指針となる現在の幼稚園教育要領（平成20年告示）の第1章総則第1幼稚園教育の基本に「教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。」<sup>(1)</sup> また「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」<sup>(2)</sup> との記載がある。

このように子どもたちに影響を与える教員の関わり方について幼稚園教育要領の5領域「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」には教師のかかわりが直接、間接的に触れられている。本稿では各領域の「ねらい」と教師の記述のある項目を手掛かりとして教員の関わり方について考えてみたい。

## 2. 「健康」

幼稚園教育要領、健康について以下のように書かれている。

〔健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。〕

### 1. ねらい

- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。<sup>(3)</sup>

内容については（1）から（10）の記述があり「（1）先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。（5）先生や友達と食べることを楽しむ」<sup>(4)</sup>と書かれており（1）と（5）に「先生」という記述がある。

また内容の取扱いの中では（1）から（5）の中で（1）と（4）に教師の記述がある。

（1）心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。

- (4) 健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。<sup>(5)</sup>

ねらいの中で体を十分動かしということがあり幼稚園の中にはスポーツを運動の柱として教員が指導にあたっているところもある。例えばサッカーやマラソンを奨励して保育の中に取り入れているところもあるがそのことが必ずしも運動不足解消につながらない場合もある。

「全国の幼児120,000名を対象に行った運動能力調査では、多くの幼稚園で跳び箱やマットやサッカーやマラソンなどの運動が指導されています。これらの運動の指導頻度と運動能力の関係を分析した結果、指導頻度の高い園ほど運動能力が明らかに低いという結果が得られました。運動指導の様子を観察すると、子どもたちは指導者が決めた運動を何回もくり返しています。説明を聞いたり順番待ちをしたりしている時間が長く、実際に運動する時間は多くありません。保育形態との関係も分析してみましたが、一斉指導中心で保育している園が、自由な遊び保育中心の園より運動能力が低いという、運動指導頻度の結果を裏づける結果がでました。」<sup>(6)</sup>

運動推進を掲げスポーツを中心とした幼稚園であっても必ずしも子どもの運動時間が足りているとは限らない場合があることがわかる。一斉保育中心の指導形態をとっている園は子ども一人一人の行動を丁寧に見ておかなければならない。自由な遊び中心の園でも子どもの特徴を捉える必要はある。室内遊びを好む子どもの中には慢性的な運動不足をかかえている子どももいる。子どもの自主性に任せることは大切なことではあるが、教員が何もせずその子の状態を見守るだけでは不十分である。健康の領域内容「(1) 先生や友達と触れ合い安定感をもって行動する。」<sup>(7)</sup>を意識して教員が自ら遊びを通して体を動かすことが求められる。また子どもが自ら体を動かしたくなるような環境を考える必要がある。

室内遊びが好きなわけではなく、なんとなく体を動かすことが苦手に見える子どもの中には便秘がちな子どももいて、食生活から見直さなければならない子も少なからずいる。常に腹に気持ちがいって体を動かすと腹が痛くなる経験から体を動かすことに抵抗を感じる。そのことが環境を配慮してもなかなか体を動かすことにつながらないことも考えられるので、領域内容の「(5) 先生や友達と食べることを楽しむ」<sup>(8)</sup>を教員は意識して普段の子どもの食生活にも注意をはらう必要がある。気になることがあれば保護者から情報を得ることも大切である。健康の領域には単に体を動かすことだけでなく内容の取扱い (4) 「健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。」<sup>(9)</sup>と示されているが、このことは幼稚園だけではなくなかなか難しいと考えられる。そこで家庭と情報交換を密にしていくことが大切になる。領域内容の取扱い (1) 「心と体の健康は、相互に密接な関係があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わう

ことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。』<sup>(10)</sup>の基礎につながることを教師は意識する必要がある。

### 3. 「人間関係」

幼稚園教育要領、人間関係について以下のように書かれている。

[他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とのかかわる力を養う。]

#### 1. ねらい

- (1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- (2) 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。
- (3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。<sup>(11)</sup>

内容については(1)から(10)の記述があり「(1)先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。」<sup>(12)</sup>と書かれている。

また内容の取扱いの中では(1)から(6)の中で(1)、(2)、(5)に教師の記述がある。

- (1) 教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人とのかかわる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。
- (2) 幼児の主体的な活動は、他の幼児とのかかわりの中で深まり、豊かになるものであり、幼児はそこでお互いに必要な存在であることを認識するようになることを踏まえ、一人一人を生かした集団を形成しながら人とのかかわる力を育てていくようにすること。特に、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自信をもって行動できるようにすること。
- (5) 集団の生活を通して、幼児が人とのかかわりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、お互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること。<sup>(13)</sup>

幼稚園に入園する前の子どもたちの人間関係は昔から比べると希薄になっているといわれている。「2007年の中央教育審議会の答申において、現代の子どもたちが人との関わりにおいて多くの困難を抱えていることが指摘されています。また、頻発する少年少女の事件を見ても、家族をはじめ周囲の身近な人々と肯定的な関係を結べていないことがその背景にあると思われます。」<sup>(14)</sup> そういう社会の変化を受けて入園してくる子どもたちの入園前の人間関係を考えることも教師の役割のひとつだと考えられる。

ねらい(1)から(3)を実現するためには幼稚園での遊びのなかにもっともそのことが

現れる。子ども同士の遊びのなかには予想できないこともある。全日本私立幼稚園連合会監修「すばらしい園生活」という本の中に「ぶつかりあいのあとで」という子どもの姿が書かれているので紹介したい。

「園庭のすみに切り株階段があります。入園後間もないある日のこと、三歳児のKくんが初めてこれに挑戦して、恐る恐る渡っていきました。ところが彼の前にもう一人、三歳のMくんがやはり切り株をやっとこ渡っていたのです。KくんがMくんに追いつきました。そして次の瞬間、あっという間にKくんは前にいたMくんを突き落してしまったのです。不意をつかれたMくんは足を踏みはずして、太ももに大きなすり傷を作り、大声で泣き叫びました。Kくんは自分のやったことの結果にびっくりしました。早く向こう側まで行きたい、と思って、たまたま目の前に立ちふさがっていたMくんを押しただけなのに、Mくんは切り株から落ちてけがをしてしまい、大変なことになってしまったのです。『ごめんね』こうしてMくんは仲間と出会ったのです。切り株階段を渡りたいのは自分だけじゃない。同じように“楽しさ”を求め“痛み”をもつ仲間が“いる”ということに気づいた出来事でした。このように『かして』とか『いれて』とかいう人間関係をつなげていくことが通じ合うようになるまでには、様々な修羅場が子どもたちの中に繰り返されていくのです。力ずくで相手の使っている遊具やおもちゃをもぎ取ろうとして、激しいけんかになったり、並んで待っているところへ割り込もうとしてはじきだされたり、というような様々な葛藤の経験を積み重ねながら、子どもたちはしだいに仲間の存在に気づき、社会性を身につけていくのです。ぶつかりあいを通して子どもたちは、仲間とともに自分の存在を発見し、仲間を通して確かな自我の世界をつかみ、個性的な自我を自分自身の内側に形づくっていくのです。」<sup>(15)</sup>

この様子を見た時にはたして多くの教員はこのように理解することができるでしょうか、「前にいるお友達を押してはいけません」とか「どうしてそういう危ないことをするのですか」または「Mくんに謝りなさい」と押ししたKくんを注意し場合によっては叱り謝罪させる教員がいるのではないかと思います。ここで紹介されている教師の思いは内容の取扱い(1)、(2)、(5)を意識しての対応ではないかと考える。

教員は子どもの人間関係は必ずしも楽しく対等ばかりの関係だけでなくトラブルや悲しい思いやつらい出来事も起こることを想定しておくことが大切である。教員として子ども同士は仲良く楽しく育てほしいと願うことは大切だが、その思いが強いあまり事前にトラブルの芽をすぐに摘んでしまったり、喧嘩になる前に仲裁に入ってしまったたりすることが頻繁にあるようでは問題だと考える。

教員の子どもの見方や態度から友達との関わり方を子どもは学んでいくことを考えれば教育要領のねらい及び内容と内容の取扱いを十分に捉える必要がある。「今回の教育要領の改訂で加わった『共同の経験』は『友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う』力の上に初めて成り立ちます。そこに至るまでの保育者のていねいなかわりが重要です。」<sup>(16)</sup> 人間関係の領域は他の領域同様言葉のみで伝えることだけではなく直接体験や教員の行動が子どもたちに影響を与えていることを十分に踏まえることが大切になる。

#### 4. 「環境」

幼稚園教育要領、環境について以下のように書かれている。

[周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。]

##### 1. ねらい

- (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
- (2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。
- (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。<sup>(17)</sup>

内容については(1)から(11)の記述がある。また内容の取扱いは(1)から(4)までであるがいずれも教員等の記述はないが、文部科学省の「幼稚園教育要領解説」3 身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」の中には「幼児の周囲には、園内や園外に様々なものがある。人は暮らしを営み、また、動植物が生きていて、遊具などの日々の生活や遊びに必要な物が身近に置かれている。幼児はこれらの環境に好奇心や探求心をもって主体的にかかわり、自分の生活や遊びに取り入れていくことを通して発達していく。このため、教師は、幼児がこれらの環境にかかわり、豊かな体験ができるよう、意図的、計画的に環境を構成することが大切である。」<sup>(18)</sup>と教師についての記述がある。

教員は環境のねらいを意識して教育に取り組むことが求められる。ねらい(1)、(2)、(3)を考え教育に取り組む必要がある。

例えば子どもたちが散歩に出かけるときに昆虫やザリガニ、メダカ等を捕まえてくることもあると思う。そのとき教員も同じように昆虫等を捕まえクラスの中で子どもの虫かごと教員の虫かごと分けて飼育してみる。子どもの虫かごは子どもたちに任せ教員は見ているだけにする。教員の虫かごは教員が管理して子どもたちは見ているだけにする。教員は最大限の努力をして自分が管理する虫かごの昆虫が長生きするように環境を整える。子どもたちの虫かごは子どもに任せた以上エサがなくなっても掃除が行き届かず環境が悪くなってもそのままにしておく。数日すると子どもたちの虫かごの昆虫は死んでしまうのではないかと思う。教員の虫かごの昆虫は長生きすると考えられる。子ども達はなぜ自分達の虫かごの昆虫は死んで先生の虫かごの昆虫は生きているのかと疑問に思うだろう。教員はなぜの答えを伝えるのではなく「なぜ」という子どもの疑問に付き合う中で子ども達自ら考えるようにしていくことが大切である。そういう中で子ども達は飼育するためには何が必要なのか、図鑑で調べたり、昆虫に詳しい方に聞いたり、実際に昆虫がすんでいる野にでて調べることもあると思う。そういう経験を通してどんなことに気を付けるのか考えることになる。一度の経験ですべての子どもがわかるわけではないが長期的な見通しを持って関わるが必要で、場合によってはしばらく教員担当の水槽や虫かごを作り、子どもには子どもの管理に任せた水槽、虫かごを用意して飼育することもよいと考える。やがて子

ども達は飼育で必要なことをさまざまな方法で学び子どもの管理する虫かごも教員の管理する虫かごの昆虫も同じくらい長生きするようになる。そうなったときに教員の管理する虫かごをなくせばよいのではないかと考える。次に環境の領域で扱う生命の尊さについて考えてみたい。

環境の領域2内容の「(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」<sup>(19)</sup>と書かれている。たとえどんなに良い環境で管理する虫かごで飼育していても昆虫はやがて死んでしまう。こどもはどんな生き物にも寿命があることを知る。死んだ昆虫などの取扱いも子どもに深い影響を与えることを教員はよく考える必要がある。子どもにとって飼育している昆虫には愛着がありしばらくは受け入れられない場合もある。昆虫が死んだからすぐにお墓を作って埋めればそれで済みというマニアル的なかわりでは子どもの死に対する気持ちを受け入れたことにはならない。死んだ昆虫を見てなかには治療を試みる子どももいるかもしれない、死んだ昆虫に栄養のあるエサを運んでくる子どももいるかもしれない。子どもにとって死はなかなかわからないこともあり、また生き返ると思っている子どももいる。子ども一人一人の思いに配慮することが教員には求められている。

## 5. 「言葉」

幼稚園教育要領、言葉について以下のように書かれている。

「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞くこととする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」

### 1. ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。<sup>(20)</sup>

内容については(1)から(9)までの記述があり「(1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。」<sup>(21)</sup>と書かれている。

内容の取扱いでは(1)から(4)の中で(1)と(2)に教師の記述がある。

- (1) 言葉は身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意志などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得されていくものであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児とかかわることにより心を動かすような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
- (2) 幼児が自分の思いを言葉で伝えとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝えあいができるようにすること。<sup>(22)</sup>

ねらいの(1)と内容の(1)を教育の中で生かすためには教員はどのように子どもと接することが必要であろうか、幼稚園に入園したばかりのころは安心して生活できるように配慮し子ども一人一人の個性を理解することが大切になる。はじめのころは言葉によらない態度や時には泣くという表現で教員に自分の気持ちを理解してもらおうとする様子も見られると思う。こどもが自分の気持ちを言葉で表現できるようになるには教員との信頼関係を基にして「話してみたい、伝えたい」という気持ちを育み受け止め、丁寧に聞くことという姿勢が大切になる。子どもと視線を合わせ、時間をかけて子どもの話にうなずきながら時には微笑みながら聞くという態度から子どもはこの教員なら話してもよいという気持ちが芽生えてくる。その様子を見ている子どももいる。子どもの話を繰り返し聞く中で信頼関係が生まれ教員に子ども達が話したいという気持ちがでてくる。やがて幼稚園生活になれば教員との信頼関係が出来てくると、子どもは友達に興味をもち一緒に生活するなかで伝え合い、共感するようになってくる。友達ができ仲良くなってくると、ときには遊びを通して自分の考えや意図を主張するようになり、子ども同士のトラブルに発展することもある。教員としては仲良く遊んでほしいという願いからつい止めたくなることもあるが、場合によってはすぐに止めるのではなくトラブルは子ども同士が自己主張をし、自分の意見を出し合う機会と考えれば、対応は違ってくる。トラブルが終わってからの後味の悪さも経験することで相手の気持ちを考えるきっかけにもなる。そういうことを繰り返しながら子どもは友達に「言ってはいけないことがある」、「相手を傷つける言葉がある」ということにゆっくりではあるが気付いていく。やがて子ども達は成長し教員や友達だけでなく身近な人と会話をするようになり、自分の思いを伝える楽しさを知るようになっていく。

ねらい(2)と内容の取扱い(1)、(2)を意識するために必要な教員の役割は何であろうか、教員が子どもに話を聞かせようとするときにやりがちなのが手遊びなどで「手はおひざ、口はチャック」の言葉がけで静かにしようとする。ときには、そういうやり方も必要な場合があるかもしれないが、本当の意味で子どもに話をよく聞かせるときにはどのようにすることが大切なのか考えたい。子どもが聞きたいと思うことや必要性を伝えるのが大切ではないか『聞きたい』という気持ちが生じないときに、強制的に聞かせることは困難です。できたとしても、そのときだけで、自ら人の話を聞く意欲や態度の形成にはつながりません。幼児は相手とのやりとりを通して心地よい関係が形成されてくると、相手を知りたい、相手の話を理解したいという気持ちが高まり、相手の行動に注意や関心を向けたり、相手の話を聞くようになります。本来、人と人が理解し合い、心が通い合うためには、一方が話をするだけでなく、相手の話を聞くという、いわばキャッチボールのようなやりとりが必要です。』<sup>(23)</sup> 子どもが聞きたいという気持ちを持たせるためには、子どもの興味関心のあることや聞いてよかったなどの経験を積むことも必要になる。また日頃の教員の子どもの話を聞く姿勢がモデルになっていることを意識する必要がある。教員から聞いてもらう体験を通して子ども同士のやり取りの中で互いに聞いてもらうという関係が出来上がり、聞いてもらえる嬉しさを実感するなかで聞くことの意味を子どもは理解していく。

ねらい(3)絵本や物語などに親しむことは幼稚園の教員ならばよくわかっていることと思うが、それゆえに気を付けなければならないことがある。「絵本を見ながら、親がいろ

いろいろ質問することはいいことだという考え方もあります。そうすることによって、子どもが注意深く絵を見るようになるし、だまって見ていたときには気がつかなかった点を知るようになるし、絵を見ながら親と話をする楽しみもあるというわけです。幼稚園などで、子どもの言語活動を活発にさせるために、絵本を見て、子どもに話をさせるように指導している場合があります。絵本を、知識をふやすための道具、言語活動をひき出すための材料と考えれば、確かに親の質問や説明は必要でしょう。観察絵本と呼ばれる種類の絵本や、『絵本百科』、あるいは図鑑類を見る場合は、むしろそうした読み方をしなければならぬでしょうし、物語絵本でも、子どもが幼くて、物語の展開には興味ももたず、理解もできないという場合には、一場面一場面を、これは何、あれは何、というふうに見ていくよりしかたないと思います。しかし、物語絵本の場合、しかも子どもが成長して、一つの場面と次の場面のつながり、つまり物語の展開に、より大きな興味をいだくようになった場合にも、そうした読み方をしていいのでしょうか。』<sup>(24)</sup> 絵本を利用してつい文字の教育や知識の習得に力を入れてしまいたくなることもあると思うが、領域「言葉」でのねらいはそういう狭い捉え方をしないことを教員は意識しておくことが大切である。絵本や物語の世界を子どもが自由に理解することで抽象的な概念や想像する世界が広がることの方が大切なことであり、言葉の持つイメージを広げることにつながる。

## 6. 「表現」

幼稚園教育要領、表現について以下のように書かれている。

「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通じて、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」

### 1. ねらい

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。<sup>(25)</sup>

内容については(1)から(8)の記述がある。また内容の取扱いは(1)から(3)まであり内容の取扱いの中では(1)から(3)の中で(1)、(2)、に教師の記述がある。

- (1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。
- (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。<sup>(26)</sup>

子どもの好きな遊びのひとつに色水遊びがある。木の実をつぶして水に入れて色水を作ったり、色つきの紙テープをちぎっては水の入ったビニール袋の中に入れ、手でもんだ

りして色水にするなどおもしろい方法を考える。ときには一種類でなく何種類かの色つき紙テープを入れて自分で色の調整を試みる子どもがいる。なかにはたくさんの色の種類を入れすぎて黒のような色になってしまう場合がある。そういう姿を見ていると教員はその使い方は正しい使い方ではなく、もったいないと注意したくなる。しかし領域「表現」のねらいを考えれば、むしろ自発的な遊びで子どもらしさがでていているということを理解する必要がある。

子どもは外遊びが大好きで散歩に行ったときなどは自然の中にいる昆虫や植物をよく持ちかえる。バッタのみどりは必ずしもクレヨンのみどりでなく絵具のみどりでない、子どもは生きているバッタと触れ合うことで自然が作る色に出会う。トンボの絵を描いていた子どもはトンボの羽をどう描くか迷ったすえにトンボの羽をハサミで切って自分の書いていたトンボに羽を貼りつけた。残酷なように見える行為ではあるがその子どもにとってはどうしても表現したかった羽であった。すすめられることではないが、クレヨン、絵具ではどうしても表現できなかったようであった。また幼稚園で飼っている亀を描きたいと思った子どもは教員が渡した画用紙に描くことでなく亀の形に似た石を見つけてきてそこに亀を描いた。「幼児は、あるものに出会い、心が揺さぶられて感動すると、感じていることをそのまま表そうとする。その表れを教師が受け止め、認めることによって、幼児は自分の感動の意味を明確にすることができる。」<sup>(27)</sup> 絵は画用紙に描かなければならないと思っている教員を驚かせた。

内容の取扱い (1), (2) を意識すれば、こどもの行動を時には見ていることも大切になる。冬の寒い日に霜柱が小道にできた、太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。そのことに気がついた子どもがその霜柱を根本の土ごと掘り起こしビニール袋に大事そうにしまう。降園のときに家に持ち帰るつもりで靴箱の上に静かに置いたが帰りになるとそのビニール袋の中は泥水になっていた。誰も触った様子がないそのビニール袋をとっても不思議そうに眺めていた。大人であれば、霜柱が溶けて水になり下についていた土と混ざり泥水となったことは簡単に想像できるが子どもにとっては理解しがたい不思議なことのようであった。教員に今までのことを話し、その結果このように泥水になり不思議だという話に教員は解説するわけではなく一緒に不思議がった。何度か経験する中で霜柱が溶けて水になることが分かれば、今の不思議は解決するだろう。しかし今の不思議が子どもの知りたい、調べたいにつながれば教員は一緒に不思議がることも大切でないかと考える。

教員はなんでもすぐに教えるだけの存在だけでは不十分で、子どもの不思議やなぜに真剣に向き合い、ときにはユーモラスに付き合う存在にもなってほしい。教員のそういう態度が子どもの表現活動を広げ、興味関心の幅を広がることになる。

## 7. おわりに

幼稚園教育要領（平成20年告示）の第1章総則第1幼稚園教育の基本に「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」<sup>(28)</sup>と書かれている。また文部科学省幼稚園教育要領解説書（平成20年10月）には「教師自身も環境の一部である。教師の動きや態度は幼児の安心感

の源であり、幼児の視線は、教師の意図する、しないにかかわらず、教師の姿に注がれていることが少なくない。」<sup>(29)</sup> 幼稚園教員は子どもに与える影響の大きさを絶えず感じ考え、行動することが求められている。入園して間もないころの子どもにとって教員はとても頼りになる存在であり、安心感を与える人でもある。子どもが園生活に慣れてきてからは友達のようにもあり、頼りになる大人でもあり、自分の気持ちを分かってくれる存在でもある。ときには子どもの前に立ち、ときには子どもの後ろから見守る人でもある。新しい経験や体験を計画的に行い、ときには偶然にはじまった遊びにのめりこむ人でもある。

幼稚園教員のこどもへの関わりかたについての一考察について考えてきたが子どものことを常に考え計画的に教育を組み立て、目の前の子どもの興味関心にも注意を向け柔軟に対応できる教員が子どもにとって嬉しい教員になるのではないかと考える。

## 引用文献

1. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 4頁
2. 同上4頁
3. 同上6頁
4. 同上6頁
5. 同上7頁
6. 無藤隆，柴崎正行，秋田喜代美，幼稚園教育要領の基本と解説 フレーベル館 41，42頁
7. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 6頁
8. 同上6頁
9. 同上7頁
10. 同上7頁
11. 同上7頁
12. 同上7頁
13. 同上8，9頁
14. 無藤隆，柴崎正行 編，新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて《別冊発達29》〈2009年〉ミネルヴァ書房 53頁
15. 全日本私立幼稚園連合会監修 すばらしい園生活 昭和62年 世界文化社 55，56頁
16. 無藤隆，柴崎正行，秋田喜代美，幼稚園教育要領の基本と解説 フレーベル館 59頁
17. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 9頁
18. 文部科学省 幼稚園教育要領解説（平成20年10月） 120頁
19. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 9頁
20. 同上10頁
21. 同上10頁
22. 同上11頁
23. 無藤隆，柴崎正行，秋田喜代美，幼稚園教育要領の基本と解説 フレーベル館 91頁
24. 松岡享子 えほんのせかいこどものせかい（1987年）日本エディタースクール出版部 20，21頁
25. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 11頁
26. 同上12頁
27. 文部科学省 幼稚園教育要領解説（平成20年10月） 170頁
28. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 4頁
29. 文部科学省 幼稚園教育要領解説（平成20年10月） 29頁

A Consideration of Preschool  
Teachers' relationship to Children

TOBITA, Takashi

Teachers' relationship to young children is extremely important. Teachers must endeavor to create a better educational environment with children.

Most important is that teachers should help children, through daily play, find a key to good relationships with others and to foundation of learning hereafter.

This study is to consider effects on children caused by teachers' attitude or working in 5 areas, 'Health,' 'Human Relationship,' 'Environment,' 'Language,' and 'Expression' in *Course of Study for Kindergarten* (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology 2008). Especially some points describing of teachers in these 5 areas are considered and concrete examples are shown as many as possible in this study. Other points cannot be referred this time because of limited space. So it will be my next assignment.

